

佐賀・山口の大学生における アスペクト表現の実態

二階堂 整

1 はじめに

二階堂 2021 では、九州の大学生の談話によるアスペクト調査を行い、ヨル形・トル形の使い分けが揺らぎつつあるという実態を明らかにした。ただ、九州内でもその状況は様々であり、比較的その区別を保っている福岡・大分もあれば、揺れがかなりすすんでいる鹿児島・熊本もあった。

今回、二階堂 2021 で調査ができなかった佐賀県と、九州の隣である山口県で、同じ大学生の調査を実施した。本稿は、その結果報告である。

西日本では、アスペクト表現で継続相ヨル／結果相トル（ Chol ）の 2 区分がある。最近はこの対立が揺らぎ、ヨルの領域へトルが進出しているとされる（工藤 2001 等）。

本稿では、二階堂 2021 に続いて、本稿でも談話調査という方法を取り、佐賀と山口の 2 つの県のアスペクトの実態を明らかにしていく。その際、二階堂 2021 を加筆修正して取り込んでいく。

2 先行研究

まず、これまでのアスペクト表現に関する先行研究を簡単に整理する。

2-1. 科研アンケート調査（工藤 2001・2000）

工藤 2001、2000 の科研研究では、全国統一調査票により、その土地出身の日本語学研究者が内省により回答した。その調査結果では主体動作動詞か

らヨル・トル対立が失われ始めるとされた。

工藤 2001 では、九州のアスペクトにつき、次のまとめ（部分抜粋）をしている。

①「シヨル」と「シトル」のアスペクト対立がうしなわれつつある。「シヨル」形式の意味の方が「シトル」形式で表現されるようになっていき、逆の傾向はない。

②これは動詞のタイプからいうと、主体動作動詞（非限界動詞）からはじまる。なお、すべての方言において、「思う」のような状態的な動詞では、基本的にシヨルとシトルのアスペクト対立はない（筆者注「思ットル」となる）

2-2. 福岡談話調査（二階堂 2006）

二階堂 2006 では、福岡市の約 1 時間の談話調査を 3 世代に実施し、アスペクトを見た。

そのうち、若年層談話と中年層談話では、それぞれ、ヨル・トル形がほぼ同数（若年層 40 近く 中年層 80 近く）出現した。福岡では区別が保たれているようであった。さらに若年・中年とも否定形は、ほぼすべてがテナイ形であり、2-1 の調査と異なる結果（工藤 2001・2000 ではテナイが出現せず）が現れた。また、状態動詞の中で比較的数の多い「思う」についてみると、若年層談話と中年層談話の結果合算で、ヨル形 5 例、トル形 3 例、テル形 1 例であり、状態動詞「思う」はヨル／トルの両形が出現した。これも、2-1 の調査結果まとめの②とは異なる点であった。

2-3 場面設定による調査 大分県・福岡県（二階堂 2015）

場面設定による談話調査を 2009～2013 年度にかけ、大分・福岡で実施した。生え抜きの高年層（7,80 代）・青年層（2, 30 代）・中学生の男女 1 名ずつに対し、それぞれの世代ごとにペアとなり、その場で、以下の場面設定で 1, 2 分程度の話をする（演じてもらう）方式である。場面は、①朝、②夜、③道、④買物、⑤出がけ、⑥帰宅、⑦祝儀、⑧不祝儀、⑨自由会話（⑨のみ

10分程度)の9つで、例えば、道の設定は、道でばったり出会って立ち話をしてもらう方式である。高年層はすべての場面を実施、青年層は⑦・⑧を除き実施、中学生は、⑤～⑧を除いて実施した。対象とした調査地域は、大分県の12地点と福岡県の3地点である。

結果として、高年層はもちろんのこと、中学生でも、数の上でヨル形(しかも現在形)がよく使用されていた。さらに、2-1のまとめで、変化(ヨルからトルへ)が始まるとされる主体動作動詞「言う」ではヨル/トル(チョル)のそれぞれの数は、61/5、「飲む」では、3/7、「見る」は、6/6であり、工藤2001のまとめ②について、数の面からも対立が失われつつあるとの指摘は疑問がでてくる。

中学生では、アスペクトの否定形において、やや、ヨラン/トラン(チョラン)形を使用せずに、テナイ形(テネーが多数)を使用する傾向があった。これは、2-2の福岡の結果と一致する。ヨル・トルの区別は、談話からは、区別が保たれているものの、否定形において、両者の区別が無くなり、テナイ(テネーも含む)に変化する動きが見てとれる。

さらに、状態動詞「思う」は、ヨル/トル(チョル)両形が出現(44/31)し、ここでも、2-1のまとめと異なる部分が出てきた。

2-4 配慮表現談話調査 大分県(二階堂2018)

この調査は配慮表現の研究を目的としており、「体育祭の審判交代」「ゴミ当番の交代」「道での尋ね」の3つの場面設定の談話調査を老年層・大学生・中学生に対して実施したものである。調査地点は、大分市・竹田市・日田市の3か所である。場面設定の談話調査という内容を生かして、その資料からアスペクト表現を観察していった。

結果として、大分県3地点では、大きくは、ほぼ3世代とも、ヨル・チョルの区別を保っているといってよい状態であった。全体として、テル形の使用はほとんどなく、結果相の語形もトルでなく、チョルがよく使用されている。数から見て、上の世代ほど、アスペクト表現をよく使用するとの傾向はうかがえる。ただし、中学生は談話の時間自体が短いせいもあり、大分市で

は、 Chol は出現したが、 Yorl は結果として出てこなかった。

否定形は、その数そのものが多くないため、判断はしかねるところである。

状態動詞については、数の多かった「思う」は、3 世代全体で 20 例、出現した。うち、 Yorl 形が 9 例、 Chol 形が 8 例、 Terl 形が 3 例であった。2-2 の結果と同様、状態動詞「思う」はやはり、 Yorl・Chol の両方の形が使用されていると見ることができる。

ただ、新しい変化を予兆される動きが男子大学生の談話結果にみられた。大分市では、 Terl 21 例（大分市大学生男子アスペクト表現全 33 例中）が大学生男子に出現し、竹田市では、 Terl は 1 例だが、 Chol でなく、 Tol 7 例（竹田市大学生男子アスペクト表現全 22 例中）が同じく男子大学生に出現、日田市では、 Tol 3 例・ Terl 6 例（日田市大学生男子アスペクト表現全 14 例中）が男子大学生に出現している。いずれも、大きくは共通語へ向かおうとする変化であった。

ここに、従来とは違った動きを見ることができる。3 地点とも、男子大学生に、 Yorl / Tol の区別維持を越えて、(Chol でなく) Tol、そして Terl への動きが見られた。ただし、これらの男子大学生が少数ではあるが、 Yorl / Chol を使用していることは注意する必要がある。2-3 の先行研究では、青年層が調査対象であり、実際は地元の、20~30 代の社会人の調査であった。一方、この調査は、地元出身の同じ大学の学生同士の会話である点が異なる。その点から考えると、大分県の男子大学生の結果の、 Tol さらに Terl の使用は、アスペクト表現に変化が起りつつある予兆を示しているのではないかと思われる。

2-5 二階堂 2021

二階堂 2021 では、佐賀を除く九州各県の大学生にアスペクト調査を行った。談話による調査で、2-3 の調査方法の青年層と同じ形式をとった。方式は今回の佐賀・山口と同じため、詳細は 3 の調査概要で述べることにする。2018 年度、2019 年度にかけて調査を実施した。

結果は表 4 を参照していただきたい。縦軸には、より区別を保つ県を上

置いた。

まず、同じ九州の大学生の談話にもかかわらず、そのアスペクト表現にかなりの違いがあることが明らかになった。福岡は、数と割合からも、アスペクトの区別がよく保たれているとあってよい。アスペクトの区別が揺らぐ際、ヨルの領域へトルが進出するとされているが、福岡では語数の半数近くがヨルであり、その点からも区別が安定しているといえる。テルの割合が23%と多いように思えるが、26語のうち、18語が否定形のテナイであり、これは2-2から2-3の結果と一致する。大分も、区別をよく保ち、トルではなく、地元の方言の Chol 形が出現している点は伝統を引き継いでいるとかがえるが、テルの使用、それも否定形でないものが多い点から、2番目に置いた。

この2県の次の段階が長崎である。ヨル／トルの使用数や比率はかなり下がるが、宮崎よりは、ヨル／トルの使用率（長崎のトルは宮崎のトル・Chol 合計より率が高い）が高いことと、テルの使用率が宮崎より低い（しかも否定形の割合は宮崎より多い）点に着目して3番目とした。宮崎は第4位である。長崎と近い比率を示すものの、方言系のどの項目も長崎より低く、さらにテル形の使用が多いのがポイントである。熊本はトルの使用率は高いものの、ヨルの比率があまりにも低く、5番目とした。問題は6番目の鹿児島である。ヨルが皆無、トルもほんのごくわずかで、圧倒的にテルが多い。しかもテナイの否定形が必ずしも多くを占めているわけではない。ヨル・トルの区別がなくなっていく状態である。

否定形は九州の6県すべて、テナイの1つになる結果となった（宮崎のChoran・Tran各1例を除く）。ヨル／トル区別の揺らぎは、実際はこのテナイから起こるのではないだろうか。トルがヨル領域へ進出する変化ではなく、まず否定形がテナイに変わり、それに引きずられて、ヨル／トルが区別をなくし、さらにテルへと変化していくことが予想される。

なお、状態動詞は本調査では、出現数そのものが少なく、ヨウがつくかは、はっきりしたことは言えなかった。

以上の 2-1 から 2-5 の先行研究結果をまとめると、まず、アンケート調査と談話調査では、結果が異なることがある。目的も調査方法も同一ではないので、同じように扱うわけにはいかないが、結果の相違点は注意する必要がある。

さらに九州全体では比較的、ヨル／トルの区別が保たれているように思う。

ただし、大学生の調査からは、それが揺らぎつつある様子も見てとれる。その揺らぎは、ヨル形の領域にトル形が侵入するという変化からではない。まず否定形がテナイに変化することが最初の段階であるように思う。

3 調査概要

アスペクト調査では、アンケートによって、適切な結果を得ることが難しい。話者に調査の意図を理解して回答してもらうことが難しいためである。かといって、意図を説明しすぎると回答に影響を与えてしまう。そこで、なるべく自然な形で回答を得るために場面設定による談話調査を実施した。幸い、アスペクト表現はどの談話にも出やすく、ある程度の調査時間を確保すれば、おおよその実態を探ることができる。

本研究では、二階堂 2021 と同じ方法をとった。以下の場面設定で男女のペアが 1, 2 分程度の話をする（演じてもらう）方式である。場面は、①朝、②夜、③道、④買物、⑤出がけ、⑥帰宅、⑦自由会話（自由会話のみ 30 分以上）の 7 つで、例えば、道の設定は、道でばったり出会って立ち話をしてもらう方式である。この方式は松田 1960 によるもので、すでに実績もあり、古い調査結果とも比較できるため、同じ方法を用いた。

二階堂 2021 では、九州各県を調査する予定であったが、佐賀はうまく話者を見つけることができなかった。そこで今回は佐賀を調査した。さらに九州の隣の山口は方言の面で九州とつながる点も多く、古い形を残すこともあるため、今回、調査に加えることとした。

調査地域や話者は、佐賀と山口の大学生男女 1 名ずつである。各県の調査地選定の条件は、その県の代表的方言地域出身とした。結果として、佐賀は佐賀市を中心とする方言地域、山口は山口市を中心とする方言地域となった。

佐賀・山口の大学生におけるアスペクト表現の実態（二階堂）

具体的な話者については、山口はお世話になった大学の先生に、条件に合う学生1名をまず選んでいただき、さらにその学生が一番話しやすい異性を選ぶ方式をとった。佐賀は勤務先の学生を通じて、大学生の話者をお願いした。調査は2023年に実施した。調査は勤務先や訪問先の大学の教室を利用した。場面設定の①朝から⑥帰宅までは、筆者が立ち会い、説明しながら談話を収録した。その後の自由会話では何を話題にしてもいいこととして30分ほどのおしゃべりをしてもらうことにした。自由会話のみ筆者は調査場所を離れ、30分後に戻ってきて、調査終了とした。ある程度の量の資料を確保し、かつ、自然な会話を収録することに努めた。表1が2県の収録時間の結果、表2が九州各県の収録時間の結果（二階堂 2021）である。おおよそ、どの県も一定以上の時間を確保できたと考えている。

表1 表示単位 分:秒

設定場面	佐賀	山口
道	1:25	2:08
朝	1:54	2:01
夜	2:16	1:58
買い物	2:00	1:32
出がけ	1:39	2:01
帰宅	2:42	2:08
自由会話	23:31	29:18
会話合計時間	35:27	41:06

表2 表示単位 分:秒（福岡の朝の場面は諸事情により資料なし）

設定場面	福岡	大分	長崎	宮崎	熊本	鹿児島
道	1:43	3:08	0:50	1:27	0:56	1:26
朝	-	2:25	0:50	1:09	1:05	1:33
夜	1:25	2:08	1:25	1:16	1:18	1:45
買い物	1:31	2:52	1:49	2:02	1:03	2:07
出がけ	1:28	2:17	1:40	2:08	1:07	1:47
帰宅	1:16	2:16	2:02	1:29	1:15	1:52
自由会話	28:16	30:21	30:05	26:23	29:25	32:45
会話時間合計	35:39	45:27	38:41	35:54	36:09	43:15

4 考察

4-1 佐賀

表3によれば、ヨルが1つも出現しなかった。自由会話でも出てこない状態であった。トルは出てくるものの、テルの出現数に比べれば、圧倒的に少ない。鹿児島と同じ状況である。表4にいれるとすれば、鹿児島の1つ上の位置づけとなりそうである。

ただ、否定形はテナイのみであること、テイル・テイナイが出てこない（鹿児島の1例を除く）の2点においては、九州全県と共通の結果であった。

4-2 山口

表3によれば、ヨルが自由会話でのみ、出現している。伝統的には Chol

の地域であるが、出現しなかった。ただし、トルの形でかなりの数が出てくる。テルの形もあるが、トルの半分程度であり、そのうち、否定形のテナイが半分を占めている。山口はヨルが使われなくなり、チョルがトルへ変化している状態かと思われる。表4の位置でいえば、熊本の下（ただし、佐賀よりは1つ上）となりそうである。

否定形はテナイのみであること、テイル・テイナイが出てこないことは他と同じ結果である。状態動詞は出現数が少なく、ヨルがつくかは、判断しがたいところである。

表3 県別・語彙別 アスペクト表現分布表 ()は否定形の数 空欄は0を意味する

	ヨル (ヨラン)	トル (トラン)	チョル (チョラン)	テル (テナイ)	テイル (テイナイ)	合計
佐賀						
場面設定		2 11.8%		15 (4) 88.2%		17 100.0%
自由会話		4 6.2%		61 (4) 93.8%		65 100.0%
合計		6 7.3%		76 (8) 92.7%		82 100.0%
山口						
場面設定		11 73.3%		4 (1) 26.7%		15 100.0%
自由会話	10 17.5%	30 52.6%		17 (10) 29.8%		57 100.0%
合計	10 13.9%	41 56.9%		21 (11) 29.2%		72 100.0%

表4 県別・語彙別 アスペクト表現分布表 ()は否定形の数 空欄は0を意味する

	ヨル (ヨラン)	トル (トラン)	チョル (チョラン)	テル (テナイ)	テイル (テイナイ)	合計
福岡						
場面設定	9 52.9%	3 17.6%		5 (5) 29.4%		17 100.0%
自由会話	42 44.2%	32 33.7%		21 (13) 22.1%		95 100.0%
合計	51 45.5%	35 31.3%		26 (18) 23.2%		112 100.0%
大分						
場面設定	11 36.7%		11 36.7%	8 (3) 26.7%		30 100.0%
自由会話	25 24.0%	4 3.8%	27 26.0%	48 (10) 46.2%		104 100.0%
合計	36 26.9%	4 3.0%	38 28.4%	56 (13) 41.8%		134 100.0%
長崎						
場面設定	2 10.0%	8 40.0%		10 (5) 50.0%		20 100.0%
自由会話	8 13.1%	8 13.1%		45 (3) 73.8%		61 100.0%
合計	10 12.3%	16 19.8%		55 (8) 67.9%		81 100.0%
宮崎						
場面設定	1 7.7%		2 (1) 15.4%	10 (4) 76.9%		13 100.0%
自由会話	10 12.2%	4 (1) 4.9%	8 9.8%	60 (6) 73.2%		82 100.0%
合計	11 11.6%	4 (1) 4.2%	10 (1) 10.5%	70 (10) 73.7%		95 100.0%
熊本						
場面設定	1 11.1%	3 33.3%		5 (1) 55.6%		9 100.0%
自由会話	6 5.8%	18 17.5%		79 (31) 76.7%		103 100.0%
合計	7 6.3%	21 18.8%		84 (32) 75.0%		112 100.0%
鹿児島						
場面設定		1 3.8%		25 (5) 96.2%		26 100.0%
自由会話		1 0.9%		109 (11) 98.2%	1 0.9%	111 100.0%
合計		2 1.5%		134 (16) 97.8%	1 0.7%	137 100.0%

4-3 全体の考察

ここでは、二階堂 2021 の九州各県の資料も取り入れて、佐賀・山口の考察を行う。

アスペクト表現として、ヨル／トルの区別がよく保たれている順に並べれば、福岡・大分・長崎・宮崎・山口・佐賀・鹿児島順に並ぶ。今回の佐賀・山口は区別が崩れつつある県という結果となった。

佐賀・山口の大学生におけるアスペクト表現の実態は、ヨル形／トル形の使い分けが揺らぎつつある点があるといえる。このことは、二階堂 2021 の結果と変わらなかった。ただ、その状況は各県ごとにかなり異なる。佐賀・山口・鹿児島のように、テル形へ進んでいる地域もあれば、ヨル形／トル形の使い分けを比較的良好に保つ福岡県があるなど、様々である。ヨル形／トル形の使い分けの揺らぎも、その状況は一様でない。その変化は、ヨル形の領域にトル形が侵入するという変化ではなく、まず否定形がテナイに変化することを最初の段階とするようである。そのことはどの地域でも否定形はテナイとなっている点からもいえる。

これは、二階堂 2021 に記したように、否定という意味が大きいのと思われる。現実を考えると、否定形においては、ヨラン／トランの区別はあまり重要でないと思われる。

改めて整理すれば、アスペクト表現のヨル／トルの区別の揺らぎは、ヨル領域にトルが進出するのでなく、共通語の影響を受け、まず一気に否定形をすべて、テナイにする形で進む。それをきっかけに、ヨル／トル区別が薄れ、テル形（この場合は肯定型）に進んでいくのではないだろうか。ただし、どの県でもテイル・テイナイという形は見られなかった（鹿児島のみを除く）。そこまで共通語の形に進むことはなさそうである。

また、状態動詞では、トル（ Chol ）表現だけでなく、ヨルの使用が見られることがあげられる。地域によっては、実際は状態詞にもヨルが普通に用いられる場合があると考えられる。

今回、ヨルと言うことが自然な箇所、トルとなっているものがないか、改めて点検したが、話者がその事態のどこに焦点をあてているかまでは、や

はりわからず、そう断言できる個所はみつからなかった。

ただ、調査中、横で聞いていても、また文字化資料を見直してみても、前回では、全体的に鹿児島の方言形の出現が少なかった。今回も、山口・佐賀では、方言形の出現が少なかった。一方、福岡や大分は、地元の方言形が頻出する。長崎などもしばしば聞かれる。可能性として、話者の問題もあるのかもしれない。

5 おわりに

以上、佐賀・山口の大学生におけるアスペクト表現の実態について述べてきた。たしかにヨル形・トル形の使い分けは揺らぎつつあるという状態かと思われる。ただ、二階堂 2021 の結果も踏まえると、九州内でもその状況は様々であり、一括りにはできない。

今後は、もう少し談話調査の数を増やし、実態解明を進めていきたい。

参考文献

- 九州方言学会編 1969 『九州方言の基礎的研究』 風間書房
工藤真由美 1995 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 ひつじ書房
工藤真由美 2000 科研報告書『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究 1』
工藤真由美 2001 科研報告書『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究 2』
工藤真由美 2002 科研報告書『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究 1』
工藤真由美 2003 科研報告書『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究 2』
工藤真由美 2004 『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』 ひつじ書房
工藤真由美 2014 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』 ひつじ書房
国立国語研究所編 2008 『日本のふるさとことば集成』 15・18・19・20
二階堂整 2004 科研報告書『地域方言の談話アスペクトにおける「話者認知スケール」に関する記述的・理論的研究』
二階堂整 2006 「談話資料からみた福岡方言のアスペクトの実態」『語文研究』100・101号 九州大学国語国文学会

佐賀・山口の大学生におけるアスペクト表現の実態（二階堂）

二階堂整 2015「談話調査の有効性―場面設定におけるアスペクト表現―」日本方言研究会第100回研究発表会

二階堂整 2018「大分県のアスペクトの実態」科研報告書『大分県方言談話における対人配慮を中心とした世代差・地域差・性差の研究』

二階堂整 2021「九州の大学生におけるアスペクト表現の実態」『語文研究』130・131
九州大学国語国文学会

松田正義 1960『方言生活の実態』明治書院

付記

協力いただいた話者の皆様に感謝します。また調査にあたり、話者の紹介などで、山口県立大学 池田史子先生にお世話になった。記して感謝申し上げる次第である。